

臨床検査値に基づく糖尿病治療薬の適正使用に関するてびき

一般社団法人 日本くすりと糖尿病学会

1. はじめに

厚生労働省より「患者のための薬局ビジョン」において、かかりつけ薬剤師としての役割の発揮にむけて、医療機関と薬局との間で検査値や疾患名等の患者情報を共有することにより、腎機能等に応じた投与量の確認や、副作用発現を未然に防ぐなど、対物業務から対人業務へのシフトが強く推奨されている。実際に、血糖値やHbA1cの検査が可能である検体測定室の設置が認可された健康サポート薬局も着実に増加していること、院外処方箋に検査値の印字をおこなっている病院も徐々に増加し、IT化による検査値の共有や糖尿病連携手帳の活用などにより、保険薬局においても、糖尿病患者の検査値把握が可能になりつつある。

糖尿病医療にかかわる薬剤師は、臨床検査値の指標とそれに対応した薬物療法の概略について把握し、効果的かつ低血糖を含めた副作用を最小限に抑え、社会生活の安全性を担保する積極的な介入が今後必要となるであろう。

そこで、糖尿病患者が継続して安全かつ有効に薬物療法を実施できるよう、糖尿病治療薬の適正使用にむけた主な検査値に関するポイントを整理した。詳細については既に多くの教科書やガイドブックなどで確認されたい。これを起点にして、より深く、幅広い取り組みを実施し、継続した薬学管理の質を高めていただきたい。

2. 糖尿病治療の一般的な目標

糖尿病治療の目標は糖尿病による血管合併症の発症と進展を防止して、日常生活を活動的で質の高い状態に維持し、健康寿命を確保していくことである。治療目標を達成するためのコントロール指標としては日本糖尿病学会より、推奨されるHbA1cが発表されているが、その目標設定は患者の病状や病態、治療内容に応じて個別化することが推奨されている(図1)。特に高齢者では、日本糖尿病学会、日本老年医学会が合同で、認知機能、日常生活動作を評価し、併用薬剤の種類や投与量にも留意したHbA1cの目標値を発表している。また、体重、血圧、血清脂質についても各々の指標(表1)に基づいた適切なコントロールを目指す必要がある。

血糖管理に影響する要因としては、糖尿病への取り組み姿勢など患者側の要因に加えて、インスリン分泌能の経時的な低下やHbA1cの季節性変動などが影響することがあり、非常に多岐にわたる。そのような中、薬剤師が検査結果を把握し現状を知ることは、なぜ血糖コントロールが変化したのかの理解につながり、患者の治療意欲を高めることに結びつく可能性があることから、療養指導に欠かせない重要なプロセスの1つと考えられる。